

書籍紹介



小杉 泰
『イスラームを読む』
——クルアーンと生きるムスリムたち』

大修館書店、2016年

ある言葉をいかに深く、かつ魅力的に説明できるのかは、その社会にどれほど精通しているのかをよく示す尺度なのではないだろうか。本書は、イスラームを特徴づける37の「言葉」を選び出し、それらの解説を通じてイスラームとその社会を論じたものである。本書は、イスラーム地域研究の泰斗であり、近年では比較文明論の観点からも精力的に研究を進める小杉泰氏の魅力が存分に反映された一冊である。著者の40年以上にわたる学究の成果や現地での滞在経験などが随所に見られ、用語の単なる解説を超えて、イスラームに関する非常に魅力的な読み物となっている。

本書は三部から構成されている。第1部「イスラーム世界を読み解く」では、「クルアーン」「モスク」「預言者ムハンマド」といったイスラームをめぐる最も基本的な単語のうち12語が選ばれ、用語の検討からイスラームの宗教としての特徴や、ムスリムとは誰か、その文明的な特質とは何かといったことが述べられている。第2部「クルアーンは語る」では、イスラームと不可分な関係にあるクルアーンから12の短い章句が取り上げられ、それらを読み解く中で、イスラーム的なものの考え方や人生観などが示されている。第3部「イスラームを生きる」では、「イスラーム都市」「男女の結びつき」「女性とヴェール」といった14のキーワードから、イスラーム社会の特質や死生観、ライフスタイルの検討がおこなわれている。

本書を貫くのは、イスラーム世界に対する温かいまなざしである。同時に、イスラーム学の確かな知識や比較文明論的な視点に基づく鋭い分析も本書の特徴と言えるだろう。例えば、第3部のキーワードの一つである「カフェ物語」には、次のようなくだりがある。「イスラーム世界では酒を飲まない。なぜ飲まないのかと言えば、「聖典クルアーンで禁じられているから」と誰もが答えるが、禁じられているだけならば禁を犯す人もいる。それよりも積極的な理由がある。それは素面を前提として楽しく交友できる文化が成立しているからだと思う」(160頁)。そうした「文化」がいかなるものかは本書をお読みいただきたいが、アルコールを禁じるという教義上の理由を超えて、それを支える文化の内実にまで踏み込んだ鋭い考察とは言えまいか。

本書を読むと、これまでイスラーム世界に滞在した際の、ふとした疑問や違和感が、実はイスラームに深く根付いたものであったことが分かり、まさに目から鱗が落ちる。エッセイ調で書かれているため非常に読みやすく、また豊富に挿入された写真も理解の助けとなる。イスラームに馴染みのない方から、これまでイスラーム世界に何度も足を運んだ方まで、あらゆる読者にお勧めしたい。

千葉 悠志・早稲田大学イスラーム地域研究機構研究助手



山下 里香

『在日パキスタン人児童の多言語使用
——コードスイッチングとスタイルシフトの研究』

ひつじ書房、2016年

本書は、日本に住むパキスタン人児童のモスク内での会話から、どのように言語や言葉のスタイルを切り替えているかを分析した社会言語学の実証研究である。現在1万人程とされる在日パキスタン人は、その多くが単身の男性で、1980年代から1990年代にかけて、査証免除協定のもとで出稼ぎ労働者として来日し、日本人女性と国際結婚することで定住するようになった。在日ムスリム・コミュニティとしてはインドネシアに次ぐ人口規模であり、全国各地でモスクの建設・運営を担っていることはよく知られている。

在日パキスタン人を対象とする著作は複数刊行されており、その研究は着実に積み上げられているところである。ただしこれまでは、移民の結婚や日本人妻との関係、ビジネスマンとしての姿を人類学的に描く研究が主流であった。それは、日本の中古車業者の約半数を占めるパキスタン人オーナーの親族経営スタイルや、生存戦略としての結婚といった、パキスタン人コミュニティのマジョリティのあり方を反映したものである。それに対し本書は、児童という新たな年齢層を取り上げており、また日本語を含めた言語に着目している点が、従来の研究を補完するものである。

パキスタン人に限らないが、移民の子供である第2、第3世代は幼い頃から現地の学校に通い、母語と現地語を流暢に使うバイリンガルとなることが多い。本書で主な分析対象となっているのは、ウルドゥー語と日本語のバイリンガルである4人の小中学生と、日本語の能力で児童たちに劣る2人の外国人教師との教室でのやり取りである。著者は、様々な社会背景と関係性を丁寧に描いたうえで、彼らの会話の流れから、どのようなコードスイッチング（言語の切り替え）が行われているかを読み解いている。特に、ウルドゥー語と日本語／英語だけでなく、日本語もしくは南アジア風日本語という一つの言語の中でのスタイルの切り替えも同時に分析している点が、本書の特徴の一つである。

本文を見てみると、第5章では「〇〇先生」と呼ぶべき教師の名前を、仲間内では「〇〇セン」と省略していることや、アンティ（おばさん）という親しみを込めた呼び方が使われていることが指摘された。著者によれば、これは児童が教師の役割を確認し、教師との境界を作る行為である。また、第8章の、教師の「しゃんと（ちゃんと）」や「きって（聞いて）」という誤用を児童が模倣するなど、権威に抵抗する事例も興味深い。

評者が最も注目したのは、第7章の「今から親に電話する」といった教師や父親の発言を、意図的にウルドゥー語で引用をするケースである。日本語が複雑な児童は、崩れた日本語やウルドゥー語は上の世代が使うものとしてお互いを認識／差別化しており、ウルドゥー語で引用することにより、親や教師といった大人の属性を確認していると著者は指摘する。この点に関しては、第2世代以降の移民研究において、母語とアイデンティティの関係を読み解くヒントに繋がりそうである。

須永 恵美子・京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科特任助教



後藤 晃・長沢 栄治（編著）
『現代中東を読み解く
——アラブ革命後の政治秩序とイスラーム』

明石書店、2016年

本書は、2010年末以来のアラブ諸国における政治変動が生じて以来の中東情勢についての論集である。「アラブ革命」をめぐる書籍は既に数多く刊行されているものの、本書は神奈川大学アジア研究センター企画の公開講座を下敷きとしたものであるためか、専門性を留めつつも現在の混迷を極める中東情勢を明解かつ分かりやすく論じている点に特徴があると言えよう。内容は、今日の中東情勢を広く読み解くための「見取り図」を提示した第Ⅰ部と、各国の現状分析が中心の第Ⅱ部から構成されている。

第Ⅰ部「中東を読み解く三つの鍵」には、三つの論文が所収されている。第1章「中東近現代史のもう一つの見方——アラブ革命の5年間を振り返って」（長沢栄治）は、域外からの介入、旧体制エリートの反撃、イスラーム運動の挑戦という三つの観点から、「アラブ革命」を読み解く視点を提示する。第2章「中東地域における現代国際政治——アクター・構造・システム」（今井宏平）は、国際関係論の観点から「アラブ革命」を読み解くための視点を提示する。第3章「中東諸国が抱える経済問題——経済のグローバル化と石油がもたらしたもの」（後藤晃）は、中東経済史の観点から、「アラブ革命」を前後とした中東情勢とその経済的背景を明らかにしている。

第Ⅱ部「各国／地域の現状の分析」には、六つの論文が所収されている。第1章「エジプト——革命の5年間」（長沢栄治）は、2011年以降のエジプト情勢を主に若者勢力・軍・ムスリム同胞団の三者の関係から読み解いている。第2章「パレスチナ／イスラエル——世界史の中のオスロ合意「近代のプロジェクト」の挫折？」（臼杵陽）は、1993年にイスラエルとPLOのあいだで締結されたオスロ合意の意味を広く世界史のなかに位置付けながら考察している。第3章「シリア——内戦と多民族・多宗派問題」（黒木英充）は、2011年に始まるシリア内戦の過程を五期に分けて説明するとともに、内戦のメカニズムについて考察をおこなっている。第4章「イラク——戦後統治の失敗から「イスラーム国」の台頭へ」（吉岡明子）は、2003年の戦争後のイラク政治のプロセスと問題、またそうした混乱のなかで勢力を拡大したISをめぐる昨今の動きを論じている。第5章「イラン——政治の底流にある諸派閥興亡の歴史と展望」（ケイワン・アブドリ）は、とくに2000年代以降のイランの政治状況を、イランをとりまく国際政治の状況と絡めながら論じている。第6章「トルコ——創造的破壊者としての公正発展党」（今井宏平）は、2002年以降トルコの単独与党の座を維持する公正発展党を取り上げて、それが世俗主義、クルド問題、外交に与えたインパクトを検討している。第2部の各章には、各国ごとのコラムが設けられ、興味深いエピソードが記されている。

千葉 悠志・早稲田大学イスラーム地域研究機構研究助手



鷹木 恵子

『チュニジア革命と民主化

——人類学的プロセス・ドキュメンテーションの試み』

明石書店、2016年

本書は、「アラブの春」の契機となったチュニジアにおける、革命と民主化移行の過程を詳細に記述した初めての邦書といえる。具体的には、第1章では革命の要因となった地域間格差について、第2章では革命期の具体的な経緯について、第3章では革命後から臨時政権下における諸集団の動きについて、第4章ではトロイカ政権期における混乱を国民対話カルテットの仲介によって克服した経緯について、第6章では2015年の新大統領の就任と新政権発足に至る過程について論じている。さらには第5章で革命から民主化への過程における女性たちの活躍について、第7章では同過程におけるNGOなどの市民団体や市民の活動について詳細に論じている。著者がこれらの動きに焦点をあてて各章で論じたのは、ある程度成功したとされているチュニジアの民主化の特徴の一つとして、女性たちと市民団体の活動が活発であったことを指摘しているからである。

革命から民主化へと至る過程では、様々な勢力の利害関係が絡み合い、さらには予測不可能な出来事が相次いで起きる状況が続いた。そのような複雑な状況のなかで、本書は結果のみでなくその過程を重視して記述するプロセス・ドキュメンテーションの手法を用いることで、紆余曲折を経た民主化移行の過程について、優れた民族誌的記述を行っている。その手法を用いたことで特筆すべき点としてあげられるのは、マクロ・レベルの動向とミクロ・レベルの事例を関連付けていることである。大きな動向を著書や論文、新聞記事やインターネットなどの資料によって描くだけでなく、文化人類学的な現地調査によって300人以上から聞き取り調査を行い、その声を豊富に用いている。このことにより、この革命の特徴ともいえる、個々人の体験と国家や政府の動きとが関連して相互に影響を与え合う過程が、厚く記述されている。さらに、この聞き取り調査では、革命の発端となる焼身自殺を図った青年の家族や、バラクト・サーヘル事件で拷問を経験した元陸軍大佐など、実に様々な立場の声を汲みあげている。これらの貴重で多様な声を豊富に用いることにより、民主化の過程で起きた出来事の多面性と、それに携わった異なる立場の人々の多声性を見事に描き出している。

筆者も述べるように、チュニジアはイスラーム国へ最も多くの戦闘員を送り出している国とされ、またチュニジア出身者による欧州での凄惨なテロ事件も後を経たず、今後の課題は尽きない。しかしながら、ある程度成功したとされるチュニジアの革命と民主化は、このような様々な想いや意見が、対話と折衝を繰り返すことを通じて成し得たのであり、本書はその過程を見事に描き出した、傑出した民族誌といえる。

二ツ山 達朗・人間文化研究機構総合人間文化研究推進センター研究員／
京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科附属イスラーム地域研究センター客員准教授



臼杵 陽・鈴木 啓之(編)
『パレスチナを知るための60章』

明石書店、2016年

本書は、明石書店のエリア・スタディーズ・シリーズの一冊として刊行されたパレスチナについての概説書である。同シリーズは、世界各国・各地域を分かりやすく解説した入門書として定評があるが、そのほとんどは既存の主権国家を取り上げたものである。そうしたなかで、編者も述べるように、「非承認国家」としてのパレスチナに関する本が同シリーズの一冊に加わることは、我が国におけるパレスチナに対する認識を高めるうえで大変喜ばしいことと言えるだろう。

本書は6部から構成されており、そのなかに60の章と26のコラムが掲載されている。第1部「パレスチナ：イメージと実像」では、パレスチナについての基礎的知識に加えて、民族と宗教、映画におけるパレスチナ人の描かれ方、さらにパレスチナ知識人エドワード・サイードや彼の著書である『オリエンタリズム』がいかに日本で受容されたのかなどが論じられている。第2部「歴史」では、オスマン帝国時代からイギリスによる委任統治期、またイスラエル建国に伴う「ナクバ」、そしてオスロ合意を経て現在へと至るパレスチナの歴史が端的に描かれている。第3部「生活と文化」では、都市生活や植生、刺繍、演劇、文学、音楽、さらに難民の苦境に焦点が当てられるとともに、そうしたパレスチナの人々を映し出そうとするジャーナリストたちの挑戦が紹介されている。第4部「世界のなかのパレスチナ」では、国連の難民救済事業（UNRWA）の活動や、アメリカ、ソ連・ロシア、エジプト、ヨルダン、シリア、レバノン、湾岸諸国といった各国とパレスチナとの関係が明らかにされている。第5部「経済と社会」では、パレスチナの生活基盤となる産業や農業、水利、土地、農村生活、通貨、公共部門、教育、障害者福祉といった幅広いトピックが論じられている。第6部「パレスチナと日本」では、パレスチナと日本のつながりが外交、経済、援助、人的交流、物流といった観点から紹介されている。

パレスチナをめぐる書籍は、これまでも多数刊行されてきた。一方、そうした類書と比べた場合、本書は比較的若手の研究者や、現地での活動に従事する国連・NGOのスタッフなどが多数執筆者に加わっている点にその特徴が認められよう。昨今の日本では、中東というとISのような過激派やテロ、内戦、またそれに伴う難民問題にのみ焦点が当てられがちであるが、パレスチナにおいても人々の出口の見えない苦境が今なお続いている。研究者のみならず実務の分野で活躍する様々な立場の執筆者たちが、多様な角度から等身大のパレスチナを描こうとしており、彼らのパレスチナに対する熱い思いが伝わってくる。

千葉 悠志・早稲田大学イスラーム地域研究機構研究助手



松尾 昌樹・岡野内 正・吉川 卓郎（編著）

『中東の新たな秩序』
（グローバルサウスはいま③）

ミネルヴァ書房、2016年

グローバル化の進行で、旧来の南北問題における「南の世界」が置かれた状況も変化を遂げてきている。本書『中東の新たな秩序』が名を連ねるシリーズ「グローバルサウスはいま」は、こうした変化の中、「南の世界」の現況が旧来の「北」に対置された「南」という区分では分析が困難になってきていることを指摘し、新たに「グローバルサウス」なる概念による考察の必要性を謳っている。

本書は、上記シリーズの第三巻目として刊行され、現在の中東地域を考察対象にした14本もの論考を収めた論集となっている。収録される論考も、中東地域をめぐる国際政治や、イスラーム主義運動、レソティス国家論、女性難民といった地域全体に影響を与える、もしくは共通する要素を検討したものから、エジプト、チュニジア、トルコ、イラン、イラク、GCC、ヨルダン、パレスチナ問題など、それぞれの国／地域の政治・社会を分析し、その特殊性を抽出するものまで、バラエティに富んでいる。

但し、本書が収録するそれぞれの論考において、そのシリーズのタイトルとは裏腹に、「サウス」なる概念の参照の度合いに大きな差がある。中には全く「サウス」に触れずに論を展開するものもある。実際に編者のひとりである松尾昌樹氏は、本書の序章で中東各国における「サウス」的要素は薄いであることを指摘し、豊かで発展的な中東理解のためには、多様な中東の解釈の必要があると説く。シリーズの名称に冠されている「サウス」概念は、少なくとも本書では中東の多様な解釈を進める上での鍵となる概念のひとつとして掲げられていると考えるべきなのだろう。

本書の魅力は、その収録する多くの論考が、実際に松尾氏が指摘するような現代中東への理解を深める上で欠かせない多様な中東の解釈に必要な視座を扱うものになっている点である。現代の中東地域の不安定性は周知の通り宗教としてのイスラームなど、何か単一の要因へのみ還元されるものではない。地域が置かれた現状への理解を試みるには、政治学、経済学、社会学、歴史学など多様な方法論により、国家のみならず地域横断的な問題への細かな検証の積み重ねが不可欠である。本書は、中東地域をさまざまなディシプリンによって研究する第一線の専門家が集結し、各人がそれぞれのテーマにつき最新の政治・社会状況や研究を踏まえた論文を収録している。読者は、本書が掲載する上記のような多様なテーマを扱った14本の論考を通読することで、中東諸国の政治・地域が抱える現在の問題がいかにより多様な要素から構成されているか、その概略をつかむことが可能となろう。多くの論考が基礎的な事柄を含めながら丁寧に説明するスタイルで書かれており、特に学部生から大学院修士課程の学生に薦めたい一冊であるように思われた。

なお、本書最後に収録された岡野内正氏の論考は、同書の中でも異彩を放っている。グローバル化時代における中東研究のあり方を板垣雄三氏の問題提起への批判的検討から論じたこの論考は、同氏なりの我が国の中東研究の現状への提言となっている。研究とはどうあるべきか、読者それぞれが考えるための格好の素材となろう。

杉山 隆一・早稲田大学イスラーム地域研究機構研究助手



橋爪 烈

『ブワイフ朝の政権構造』

——イスラーム王朝の支配の正当性と権力基盤』

慶應義塾大学出版会、2016年

ブワイフ朝(932-1062)とは、カスピ海南岸地域に居住するダイラム出身のブワイフ家三兄弟によって樹立され、946年にアッバース朝カリフを傀儡化し、イラクからイラン西部にかけての地域を支配した王朝である。本書は著者の博士論文を下敷きとした、同王朝の政権構造に関する研究であり、日本語で著された最初のブワイフ朝に関する専門書である。以下、その内容につ

いて簡潔に紹介したい。

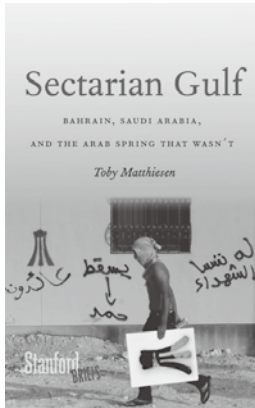
まず、序論において、著者は先行研究に対し、ブワイフ朝諸政権、即ち長男イマード・アッダウラに始まるファールス政権、次男ルクン・アッダウラに始まるジバル政権、三男ムイッズ・アッダウラに始まるイラク政権のうち、史料的制約からほぼイラク政権のみに視点が置かれてきたという問題点を指摘し、さらに、ブワイフ朝が自らの支持基盤であるダイラムを排除する傾向を有していたという見解に疑問を呈している。そこで、本研究ではイラク政権以外にも目を向けることで、従来の研究を相対化するという、全体の枠組みを打ち出している。

本論の内容は2部構成となっており、第1部「ブワイフ朝の政権構造と支持基盤——勃興期からアドゥド・アッダウラの死まで」では、第1章で「イマール(カリフから授けられるアミール(総督)の権限)」、「リアーサ(ブワイフ族内の家長の権威)」、「ムルク(カリフ以外の支配者の権限)」の概念を検討し、ブワイフ朝諸政権の各君主が如何なる根拠で自らの支配の正当性を主張したのかを考察している。続く第2章では、ブワイフ朝におけるダイラムの位置付けについて、初期のイラク政権とジバル政権の事例の比較を行っている。第3章では、ブワイフ朝の拡大過程の一事例として、ジバル政権とサーマーン朝の関係について概観し、第4章では、ブワイフ朝諸政権を統一したアドゥド・アッダウラの王統観を、アブー・イスハーク・イブラーヒーム・ブン・ヒラルール・サービー(d.994)著『王冠の書(Kitāb al-tājī)』の記述から考察している。

次に、第2部「アドゥド・アッダウラ死後のブワイフ朝諸政権——バハー・アッダウラのファールス征服まで」では、第5章でアドゥド・アッダウラの死(983)後、彼の息子であるサムサム・アッダウラとシャラフ・アッダウラの間で展開された、アドゥド・アッダウラの後継位を巡る争いを検討し、第6章では後継位争いに勝利したシャラフ・アッダウラの没(989)後、盲目のサムサム・アッダウラを擁立したファールスの政権構造を解明している。そして第7章ではイラクからファールスへと拠点を移したバハー・アッダウラのダイラムに対する姿勢・対応を検討し、第8章ではアドゥド・アッダウラの弟ムアイド・アッダウラの死(984)後、ジバルの政権が敵方であるファフル・アッダウラに継承された過程を考察している。最後に、著者は結論として、ブワイフ朝は諸政権が各個に独立しつつも緩やかにまとまりをもった連合体であったこと、イラク政権の事例を除き、ブワイフ朝はダイラム排除の傾向を見せず、ダイラムは同王朝にとって中核的存在であったことを述べている。

また、巻末には本書で使用された史料のうち、特に同時代性の高いものや重要なものについての解題が付されている。ここでは各史料の概要、著者の来歴は勿論のこと、本研究で使用した刊本及びその基になった写本についても丁寧な解説がなされており、ブワイフ朝にかぎらず、前近代イスラーム史を研究する者にとって有益な情報を提供してくれる。

福光 叶恵・早稲田大学大学院文学研究科修士課程



Toby Matthiesen.
Sectarian Gulf: Bahrain, Saudi Arabia,
and the Arab Spring That Wasn't.

Stanford and California: Stanford Briefs, 2013.

今日、中東において宗派主義が猖獗を極めている。宗派主義をめぐっては二つの異なる捉え方があるだろう。すなわち、一方には宗派の差異が必然的に対立を生み出すとする、本質主義的な捉え方がある。これに従えば、イスラームにおいてはスンナ派とシーア派の対立は不可避であるとの結論が導かれよう。他方で、宗派主義の構築された側面を強調する捉え方がある。宗派の違いが対立を必然的に生み出すのではなく、何らかの政治的な理由や特定の条件下において宗派間の差異や対立が強調されて、ときに激化するのだと考えるのが、その特徴と言える。著者はこの後者を「政治的宗派主義」(political sectarianism)と呼び表しているが、本書がとるのもこの立場である。

著者のトビー・マシューセンは、現在オックスフォード大学セント・アントニーズ・カレッジで上席研究員を務める気鋭の若手研究者である。同書は、いわゆる「アラブの春」以降の中東において、なにゆえ宗派主義が激化の様相を呈することになったのかを鋭く分析しており、今日の中東政治をよりよく理解するうえで大変重要な著作と思われる。論文調ではなく、エッセイ調の軽妙な文体で書かれているため大変読み易いが、その主義主張は一貫しており論理も明快である。湾岸諸国や宗派主義をめぐる議論に馴染みがない読者にも手に取りやすい一冊と言えよう。

歴史を紐解くならば、宗派主義の先例は枚挙に暇がなかろう。ただし、現代の中東政治を考える際に、宗派主義の問題がその主要な対立軸として浮上するのは、主に二つの出来事が契機となっていた、と著者は指摘する。第一に、サッダーム・フセイン体制崩壊後のイラクにおけるスンナ派とシーア派の対立であり、第二に、「アラブの春」における湾岸産油国の対応が、この流れを加速・拡大させた。とくに本書を読めば、宗派主義という「パンドラの箱」が開かれるうへでは、湾岸産油国の役割が大きかったことが理解できよう。

本書の議論を要約しよう。2010年末以来の「アラブの春」の波及と、それに伴う抗議デモの拡大は、湾岸産油国の為政者たちにとっての脅威となった。これに危機感を抱いた国々(とりわけサウジアラビアとバハレーン)は、宗派横断的な抗議活動を分断すべく、宗派主義を利用した。しかし、当初のいわゆる「政府主導の宗派主義」は、これを自らの目的のために利用せんとする政治的・社会的・経済的・宗教的エリートらの加担によって強固なものとなり、さらに湾岸資本のメディアを通じて大衆レベルへと波及した。そして、ひとたび宗派主義的言説が大衆レベルに浸透するにつれて、いわば「下からの宗派主義」が生じ、かくして宗派主義が実態を帯びることとなったのである。

この意味で、「宗派主義とはアラブの春に対する湾岸における短期の『解決法』であった」(130頁)。しかし、著者はこうした宗派主義の利用は、短期の解決法であっても、問題の本質的な解決方法にはなりえていないと指摘する。また、これにより解き放たれた宗派主義の問題が今日何を意味しているのかは、我々が現在の中東情勢を見ると、自ずと明らかであるものと思われる。宗派主義や湾岸政治を専門とする読者のみならず、今日の中東情勢を広く理解したい読者にも是非とも一読をお勧めしたい。

千葉 悠志・早稲田大学イスラーム地域研究機構研究助手